№9391　（2006.3.17）

第３７回（２００５年度）サントリー音楽賞は鈴木 秀美 氏に決定

財団法人　サントリー音楽財団（理事長・堤剛）は、わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた個人または団体に贈る「サントリー音楽賞」の第３７回（２００５年度）受賞者を鈴木秀美氏に決定しました。

●選考経過

１．２００６年1月9日（月・祝）東京・丸の内の東京會舘において、選考委員９名により第一次選考を行い、「候補者」を選定した。

２．引き続き3月１４日（火）東京全日空ホテルにおいて最終選考会を開催、選考委員９名により慎重な審議の結果、第３７回（２００５年度）サントリー音楽賞受賞者に鈴木秀美氏が選定され、１６日（木）理事会において正式に決定された。

●賞金は７００万円。

●鈴木秀美氏の贈賞理由は別紙のとおり。

●選考委員は下記の９氏。

礒山　雅・伊東信宏・岡田暁生・岡部真一郎・白石美雪
楢崎洋子・沼野雄司・船山　隆・三宅幸夫

（敬称略・５０音順）

＜贈賞理由＞

２００５年における鈴木秀美氏の活動は、バロック・チェロ演奏、指揮、執筆、教育など、幅広い分野にわたって活発に展開された。成果はどの分野においてもめざましいものだったが、それらの成果が互いに結びつき、氏の音楽家としての成熟に貢献していたことは、特筆に値する。

世界的に定評のあるバロック・チェロ演奏の分野で、鈴木氏はバッハの《無伴奏チェロ組曲》の全曲再録音を行い、潜在的ポリフォニーの真髄ともいうべき、見事に深められた解釈を聴かせた。その成果は、フィリアホール、浜離宮朝日ホールその他における実演でも立証された。室内楽奏者としてのすぐれた力量は、バッハ・コレギウム・ジャパンにおける通奏低音演奏を通じて一貫して示されたほか、ボッケリーニの弦楽五重奏曲やハイドンの三重奏曲（ＣＤ録音）の原動力となった。卓越した知性とバランスの取れた批判精神、耳の良さ、理論への通暁などは、鈴木氏の演奏を特徴づける要素である。それらは同時に、彼をコンサート解説やエッセイのすぐれた書き手たらしめている。その集成が著述「ガット・カフェ」であるが、そのもととなった池上實相寺におけるマスタークラス・シリーズ「ガット・カフェ」も、音楽講習会の新しい形を示すものとして注目される。

鈴木氏は、オーケストラ・リベラ・クラシカの指揮者およびリーダーとしてもますます充実した活動を展開している。ハイドンの初期のシンフォニーが魅力に溢れた楽しい音楽として認識され、熱心な聴衆を集めているのは画期的なことである。

＜略　歴＞

鈴木 秀美（すずき・ひでみ）　チェロ・指揮

１９５７年神戸市生まれ。桐朋学園大学卒業。チェロを井上頼豊、安田謙一郎ほか諸氏に、指揮を尾高忠明、秋山和慶に師事。１９７９年日本音楽コンクール第１位。１９８４年よりハーグ王立音楽院に留学し、アンナ・ビルスマに師事。１９８６年、国際バロック・チェロ・コンクール優勝（パリ）。１９８５～９３年、フランス・ブリュッヘンの「１８世紀オーケストラ」のメンバーとして、また１９８６～２００１年にはシギスヴァルト・クイケン率いる「ラ・プティット・バンド」メンバー（９２年から首席奏者）として、そして創設以来、鈴木雅明が主宰するバッハ・コレギウム・ジャパンの首席奏者としても活動。またアムステルダムなどにおいて後進の育成にも務め、１９９４～２０００年にはブリュッセル王立音楽院教授。また現在は、東京藝術大学においても教鞭をとっている。１９９８年には日本レコード・アカデミー賞、２０００年にはフランスのディアパソン・ドールを受賞。また２００１年以来、古典派を主なレパートリーとするオーケストラ・リベラ・クラシカを主宰している。

以　　上

（ご参考）

サントリー音楽賞について

（財）サントリー音楽財団では、１９６９年の設立以来、わが国における洋楽の振興を目的として、毎年、その前年度においてわが国の洋楽文化の発展にもっとも顕著な功績のあった個人又は団体を顕彰し、「サントリー音楽賞」（旧名・鳥井音楽賞）を贈呈しています。賞金は７００万円。

これまでに「サントリー音楽賞」を受賞した方々は下記の通りです。

第１回	１９６９年度	小林　道夫（ピアノ・チェンバロ・指揮）
第２回	１９７０年度	堤　　剛（チェロ）
第３回	１９７１年度	三谷　礼二（オペラ演出）
第４回	１９７２年度	小川　　昂（理論・評論）
第５回	１９７３年度	ＩＣＵオルガン委員会（国際基督教大学）
第６回	１９７４年度	秋山　和慶（指揮）
第７回	１９７５年度	栗林　義信（声楽）
		山根　銀二（評論）
第８回	１９７６年度	芥川　也寸志と新交響楽団
第９回	１９７７年度	常森　寿子（声楽）
第１０回	１９７８年度	松村　禎三（作曲）
第１１回	１９７９年度	吉原　すみれ（打楽器）
第１２回	１９８０年度	妹尾　河童（舞台美術）
	特別賞	江戸　英雄（第１回日本国際音楽コンクール会長）
第１３回	１９８１年度	柴田　南雄（作曲）
第１４回	１９８２年度	外山　雄三（指揮）
	特別賞	原　　清（ザ・シンフォニーホール建設グループ代表）
第１５回	１９８３年度	鈴木　敬介（オペラ演出）
第１６回	１９８４年度	豊田喜代美（声楽）
第１７回	１９８５年度	日本テレマン協会（室内管弦楽団・合唱団）
第１８回	１９８６年度	内田　光子（ピアノ）
		若杉　　弘（指揮）
第１９回	１９８７年度	岩城　宏之（指揮）
第２０回	１９８８年度	林　　康子（声楽）
第２１回	１９８９年度	有田　正広（古楽演奏）

第２２回	１９９０年度	武満　　徹（作曲）
第２３回	１９９１年度	尾高　忠明（指揮）
第２４回	１９９２年度	練木　繁夫（ピアノ）
第２５回	１９９３年度	五嶋みどり（ヴァイオリン）
	特別賞	ウォルフガング・サヴァリッシュ（指揮）
第２６回	１９９４年度	和波　孝禧（ヴァイオリン）
第２７回	１９９５年度	今井　信子（ヴィオラ）
第２８回	１９９６年度	園田　高弘（ピアノ）
		湯浅　譲二（作曲）
第２９回	１９９７年度	東京交響楽団
第３０回	１９９８年度	林　　光（作曲）
第３１回	１９９９年度	三善　晃（作曲）
第３２回	２０００年度	飯守泰次郎（指揮）
第３３回	２００１年度	一柳　慧（作曲）
第３４回	２００２年度	小澤　征爾（指揮）
		木村かをり（ピアノ）
第３５回	２００３年度	野平　一郎（作曲、ピアノ）
第３６回	２００４年度	西村　朗（作曲）

特別贈賞	１９７９年６月	巖本真理弦楽四重奏団
〃	１９９７年８月	黛　敏郎（作曲）

以　　上